Spring 2012

アメリカン・ビュー

AMERICAN VIEW

米国大使館

アメリカの素顔を映すマガジン

3.11 を忘れない
～東日本大震災１周年特集号～

（写真提供　Yasushi Kanno/the Yomiuri Shimbun、2011年５月４日撮影）

Sister City Relationships

被災地を支援した米国の姉妹都市の活動を紹介します

JET Alumni Activities

現役・元ＪＥＴ参加者がさまざまな形で支援の手を差し伸べました

U.S. Forces Japan

米艦船の乗組員と日本の少女の交流を紹介します

TOMODACHI

TOMODACHI は日米の次世代の若者を育成する官民パートナーシップです

東日本大震災１周年追悼イベント

From the Editor

在日米国大使館の広報・文化交流担当公使のマーク・ディビッドソンです。ワシントンから東京に着任したばかりですが、私は日本を第二のふるさとのように感じています。何年も前のことですが、北海道で大学院に通っていましたし、外交官としてこれまでに東京、横浜、札幌で勤務した経験があるからです。日本に戻り、日米両国の相互理解、協力、友好関係の拡大に再び携わることができ、とてもうれしく思っています。

今回の American View は東日本大震災１周年を特集します。震災発生当時、私は地球の裏側にいましたが、テレビで見た被災地の惨状に心が引き裂かれる思いがしました。そして他の多くの米国人と同様、私も生活再建に取り組む人々の力になれないかと考えました。

米国政府は震災直後「トモダチ作戦」を通じ、最も大きな被害を受けた地域で救助・救援・復旧支援活動を実施しました。一方米国民からは驚くほど多くの精神的支援や義援金が寄せられ、米国から大勢のボランティアがやって来ました。本号では震災後に日米間の友好の絆の強さを証明したいくつかのエピソードを紹介します。

- 姉妹都市の関係は長年にわたり米国人と日本人を結び付け、草の根レベルで互いの生活と地域社会を豊かにしてきました。また姉妹都市としての連携から、困難に直面した時の相互支援が生まれます。多くの日本人が同時多発テロやハリケーン・カトリーナの後、力を合わせて米国人を支援しようとしたように、東日本大震災後、多くの米国の市が多額の義援金を集めたり、被災地に代表団を派遣して住民を支援しました。

- 「語学指導等を行う外国青年招致事業（ＪＥＴプログラム）」の現役および元参加者もさまざまな形で被災地支援に努めてきました。元ＪＥＴ参加者のスティーブン・ホロウィッツは自らが創設したウェブサイトで、現役・元ＪＥＴ参加者によるボランティアや募金活動を促し、その活動を記録しました。

- 「トモダチ作戦」を支援していた米海軍の艦船の乗組員が、津波で流された父親の漁船を探していた少女に力を貸し、この船を無事に見つけることができました。その後この少女は家族と共にこの艦船を訪れ、乗組員に直接お礼を言いました。

- 在日米国大使館は震災後の日本との協力関係を深める長期的な取り組みとして TOMODACHI イニシアチブを開始しました。国や地方の指導者、学生、ボランティアとの対話を通じ、日米の若者同士のつながりの強化・拡大が日本の復興を支援するひとつの方法であることが明らかになったからです。夢を持ち、その実現に向け計画を立て、実行する TOMODACHI 世代を太平洋の両側で育成することを目的としています。彼らは相互理解と友情で結ばれ、共に協力して日米両国、太平洋地域、そして世界に明るい未来をもたらすために力を尽くすでしょう。

- 在日米国大使館のウェブサイトに、東日本大震災から１周年を迎えるに当たり、米国と日本で開催される追悼行事のリスト (http://amview.japan.usembassy.gov/j/amview-j20120301-06.html) を掲載しました。このリストは随時更新します。また震災以降に米国人が実施した募金および支援活動も掲載しています。

震災から立ち上がろうとする日本国民の力に、世界中の人々が感銘し、刺激を受けました。完全復興までにはまだ長い道のりが待っていますが、米国はいつも日本の側にいて復興を支援します。

Mark J. Davidson

マーク・ディビッドソン
広報・文化交流担当公使

American View

--2012 年 春号 --

編集・発行
在日米国大使館広報・文化交流部
〒 107-8420　東京都港区赤坂 1-10-5

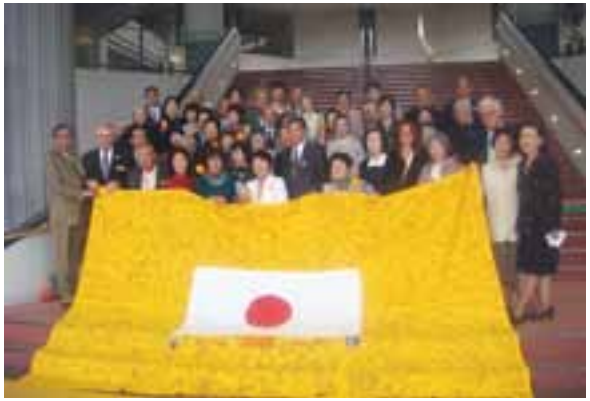
本誌掲載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。本誌に掲載されている記事、写真、イラストを非営利目的で複製することはできますが、著作権上の制限が明示されている場合には、表示された著作権者の許可を得てください。

本誌に対するご意見・ご感想は、*American View* のメインページ (http://amview.japan.usembassy.gov/j/amview-jmain.html) のフォームで送信してください。

Sister City Relationships

日米の姉妹都市――広がる支援の輪

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の後、米国の多くの都市が、被災した姉妹都市の支援に立ち上がりました。全米国際姉妹都市協会 (Sister Cities International) によると、日米間には 188 に及ぶ姉妹都市提携があり、広範なネットワークで結ばれています。そうした関係の多くが提携から 40 周年あるいは 50 周年を迎えています。姉妹都市は人と人との交流により、長期的な関係を築きます。こうした個人的つながりが、惨事や自然災害の発生に際し姉妹都市のネットワークによる支援活動を促す力となります。



東北大学への支援のシンボルとしてカリフォルニア大学リバーサイド校の学生が作った旗。この旗はラブリッジ・リバーサイド市長から奥山・仙台市長に手渡され、最終的には東北大学に展示される予定です（写真提供　リバーサイド市）

仙台市の津波被災地を視察するラブリッジ・リバーサイド市長（写真右）とアチャリア・リバーサイド市国際課長（写真提供　リバーサイド市）

カリフォルニア州リバーサイド市と宮城県仙台市は 1957 年に姉妹都市として提携しました。米国で今も続く姉妹都市関係のうち、最も古いもののひとつです。過去 50 年間に両市は、美術館、市民、青少年、政府同士の交流プログラムを多数実施してきました。2007 年には姉妹都市提携 50 周年を記念し、仙台市がリバーサイド市内のホワイトパーク公園に日本庭園を贈呈しました。庭園には立派な日本の石灯籠が置かれ、その傍には「両市の友好の絆がとわに続くことを願って」と記された碑があります。リバーサイド市から仙台市に贈られた 50 周年の記念品は、リバーサイドのかんきつ類の産地としての伝統と両市の長年の絆を記念する巨大なオレンジの置物でした。

リバーサイド市と同市の国際関係協議会は、震災後すぐに仙台市のために救援活動を組織し、その活動に活発に取り組みました。仙台救援基金を通じて集まった義援金は 50 万ドルを超え、リバーサイド市長が仙台市を訪問し、復興活動に活用してほしいと、仙台市長に直接手渡しました。リバーサイド市消防局の消防士たちも「仙台ために長靴を一杯に (Fill the Boot for Sendai)」と称するチャリティー・イベントで街頭に立ち、募金活動をしました。

リバーサイド航空ショーで仙台市のために寄付を募るリバーサイド市の消防士（写真提供　リバーサイド市）

カリフォルニア州のフォートブラッグ市と岩手県の大槌町は、2011 年に姉妹都市提携 10 周年を迎えました。両都市の提携のきっかけをつくったのは、幼い頃に漁船の事故で父を亡くし

た大槌町のある男性でした。彼は子どもの頃よく崖の上に座って海を眺め、父親の姿を探したものでした。大人になってからは、海の向こうには何があるのだろうと思い巡らすようになり、地図上に太平洋を横切る線を引いてみました。すると大槌町と全く同じ緯度にフォートブラッグという町があることが分かりました。2001 年、彼はフォートブラッグ市長に連絡を取り、大槌町に招待しました。その後、相互交流が始まり、2005 年にフォートブラッグ市と大槌町は正式に姉妹都市となりました。

愛する姉妹都市の大槌町が壊滅的な被害を受けたことを知り、フォートブラッグ市民はショックを受けました。大槌町の人口 1 万 5000 人のうち、町長を含む少なくとも 1500 人がこの災害で亡くなったのです。大槌町救援基金の創設のため、フォートブラッグ・大槌町文化交流協会のメンバーが動員されました。家や仕事、家族を失った大槌町の人々のために義援金を集めようとフォートブラッグ市全体が力を合わせた結果、人口わずか 7000 人のフォートブラッグ市が、250 万ドルを超える義援金を集めました。

テキサス州ではフォートワース国際姉妹都市協会が日本地震救援基金を創設して 2 万ドル近い義援金を集め、姉妹都市の新潟県長岡市に送りました。長岡市は地震や津波の被害を受けませんでしたが、1 万 4000 人の被災者に避難所や生活必需品を提供しました。同協会は青年大使チームを日本に派遣し、被災者を支援するボランティア・プロジェクトに参加させるとともに、フォートワース全市を挙げての募金活動を記録したビデオを長岡市職員に渡しました。

オハイオ州ユークリッド市の姉妹都市である福島県楢葉町もまた、震災で大きな被害を受けた町のひとつです。人口およそ 8000 人のこの農業の町は、福島第一原子力発電所の事故で全町避難を余儀なくされました。楢葉町の住民のふるさとでの生活再建や他県への転居を支援するため、ユークリッド市議会のグレッグ・バン・ホー議員は被災者支援基金を設立し、楢葉町の住民に直接渡る義援金を企業や個人から集めました。

宮城県仙台市の被災地域で花を手向けるデラウェア州長官
（写真提供　デラウェア州政府）

宮城県支援のための昼食会で日本からの一行と約 200 人のデラウェア州民を出迎えるジャック・マーケル州知事（写真中央）。この昼食会ではおよそ 5 万ドルの義援金が集まりました（写真提供　デラウェア州政府）

州と県のレベルでは、デラウェア州が 1997 年から宮城県と正式な姉妹県州の関係を結んでいます。デラウェア州は震災後、宮城県の救援・復興活動を支援する基金をデラウェア・コミュニティー財団に設置し、10 万ドル以上の寄付を集めました。デラウェア州から宮城県に送られた義援金は、主に震災で片親や両親を失った子どもの支援、地震後の緊急必需品の購入、県のインフラ復旧プロジェクトの資金援助に向けられました。デラウェア州の学校と生徒はそれぞれの募金イベント、小銭募金運動、手作り菓子を販売するバザーなどの募金活動を主催し、日本の友人を支援するために多くの義援金を集めました。2011 年 10 月にデラウェア州長官が宮城県を訪れ、仙台市の被災地域で白い花を手

向け、犠牲者を悼みました。2012 年 1 月には宮城県の代表団がデラウェア州を訪問し、震災後の州民からの支援に対し謝意を表しました。

東日本大震災後、米国中の人々がそれぞれの姉妹都市のために多額の義援金を集めたり、多くの励ましの手紙や絵を日本の人々に送るなど、できる限りの方法で支援の手を差し伸べました。日米両国の姉妹都市は教育や文化面での交流プログラムを通じ、困難な時期に互いに支え合う人々の強力なネットワークを築きあげてきました。このような人と人とのつながりは、日米関係をあらゆる災難に耐え得る強固なものとし、さらに強化するために不可欠です。

デラウェア州主催の昼食会の参加者に日本の状況を知ってもらうため会場に用意された展示品（写真提供　デラウェア州政府）

出典

全米国際姉妹都市協会
Sister Cities International Responds to Earthquake in Japan（http://www.sister-cities.org/news/japan_help.cfm ＝英文）

リバーサイド市
Sendai Relief Fund（http://www.riversideca.gov/sendairelief ＝英文）

仙台市
Disaster Relief Aid from Riverside（http://www.city.sendai.jp/language/1198941_1999.html ＝英文、日本語は http://www.city.sendai.jp/koryu/1198684_2446.html をご覧ください）

フォートブラッグ・大槌文化交流協会
Otsuchi Recovery Fund（http://www.otsuchi.org ＝英文）

ユークリッド・オブザーバー紙
Reaching out to our sister-city Naraha Japan（http://euclidobserver.com/read/2011/04/13/ ＝英文）

デラウェア州政府
Miyagi Prefecture, Delaware's Sister State in Japan（http://delaware.gov/HelpMiyagi ＝英文）

JET Alumni Activities

米国人の現役・元ＪＥＴ参加者による日本支援

元ＪＥＴ参加者
スティーブン・ホロウィッツ氏に聞く

問　現在「語学指導等を行う外国青年招致事業（ＪＥＴプログラム）」に参加している米国人は何人いますか。これまでに何人の米国人が参加しましたか。

答　ＪＥＴプログラムのウェブサイトによると、現役参加者は 2011 年 7 月現在、全体で 4330 人、そのうち 2322 人が米国人です。創設以来 50 カ国から 5 万 5000 人以上の人々がＪＥＴプログラムに参加しています。

問　東日本大震災後の日本の復興を支援するＪＥＴの活動で、ホロウィッツさんはどのような役割を担っていますか。

答　日本政府公認ではありませんが、元ＪＥＴ参加者向けの公式情報サイト「JETwit.com」の発行人として、情報を収集、提供する役割を担っています。JETwit は米国など世界各国の元ＪＥＴ参加者のための主な情報源です。ですから（震災後は）さまざまな情報源からひたすら情報を収集し、フェイスブックの複数のグループをフォローして投稿し、他にも情報源を探し出して、米国や世界各国の現役・元ＪＥＴ参加者とその家族の役に立ててもらうため、断片的な情報をつなぎ合わせて把握しようとしました。

その後は徐々に自分の役割を変えていき、JETwit と自分のネットワークを使って情報を共有し、人と人をつないで義援金を集め、元ＪＥＴ参加者による支援を促したほか、個々の現役・元ＪＥＴ参加者あるいはＪＥＴプログラム同窓会 (JETAA) の各支部が震災以降、さまざまな方法で復興活動を支援していることを知ってもらうために尽力するようになりました。

基本的には他の多くの人たちと同様、裏方として人と人をつなぎ、情報を共有して、状況の把握や下地作りの支援を多く手がけてきました。また米国 JETAA 救援基金 (JETAA USA Relief Fund) 委員会の発足を手助けし、私自身も委員となって、８万ドル以上の義援金を集めました。集まった義援金は、ＪＥＴ参加者の２人（テイラー・アンダーソンさんとモンゴメリー・ディクソンさん）が津波の犠牲となった２つの都市、宮城県石巻市と岩手県陸前高田市の復興プロジェクト支援に使われます。

問　これまでに元ＪＥＴ参加者が関わった救援活動を教えてください。

答　米国および世界各地のあらゆる JETAA 支部が募金活動をしました。米国の JETAA 支部は全て独立した組織であり、募金や災害救援を目的としたさまざまな活動を組織しました。ほとんどの支部は集まったお金を中央の米国 JETAA 救援基金に送りましたが、なかには同じ地域にある日本関連の組織と共同で募金活動し、日本赤十字社などの団体に寄付した支部もあります。米国 JETAA が集めた８万ドルを超える義援金は、米国 JETAA がこれまでの関係を通じ妥当と判断した複数の教育関係団体に直接寄付しました（詳細は http://jetwit.com/wordpress/2011/11/09/summary-of-jetaa-usa-fund-disbursements/ を参照）。

米国や世界各地の多くの元ＪＥＴ参加者がそれぞれ義援金を集め、さまざまな手段を通じ東北地方に直接送った点も特筆すべきです。先

日、世界中の支部を調査したところ、現役・元ＪＥＴ参加者を合わせ、記録があった分だけで、これまでに少なくとも 3800 万円（48 万 5000 ドル）の義援金を集めたことが分かりました。

日本政府は東北地方でＪＥＴプログラムに参加した経験がある人々に対し、東北で約 10 日間働き、その間に体験したことを記事やブログに書いて被災地の現状を人々に知ってもらうプログラムへの応募を呼びかけました。米国、カナダなどの国々から選ばれた 20 人のうち何人かの体験談を JETwit のページ (http://jetwits.com/wordpress/?s=return+to+tohoku) で読むことができます。他にも多くの元ＪＥＴ参加者がグループで、あるいは個人で東北に戻ってきました。

元ＪＥＴ参加者東北被災地招待プログラムで福島に「里帰り」し、かつての上司と再会したエイミー・キャメロンさん（写真提供　JETwit）

ジャパン・ソサエティーなどの非営利組織で働いている多くの元ＪＥＴ参加者も救援活動を支援しました。注目に値する例として、米国法人日本国際交流センター (JCIE/USA) の事務局長ジム・ギャノンさんがいます。JCIE/USA は多額の義援金を集めただけでなく、米国の組織や寄贈者に日本の状況や事情を分かってもらい、情報に基づく賢明な方法で寄付をしてもらう上で大きな役割を果たしました。

ＪＥＴプログラムを経験した多くの翻訳者もさまざまな支援を提供してきました。このような例があります。体制が十分に整っていない日本の非営利組織では、助成金申請書の作成の需要が大きく、その重要な一歩が申請書の英訳であることが分かりました。そこで JETwit と、その少し前に LinkedIn 上で組織した元ＪＥＴ参加者による翻訳者グループ (JET Alum Translators) を通じて呼びかけた結果、すぐに経験豊富な翻訳者チーム（全員が元ＪＥＴ参加者）を組織することができ、助成金申請書の翻訳に協力してもらいました。

問　現役・元ＪＥＴ参加者による救援活動の具体的な例を挙げてください。

答　被災地でボランティア活動をするために震災後間もなく日本に戻ってきた元ＪＥＴ参加者がいます。例えば、応急処置や二次医療の専門家スチュアート・ハリス博士は、地震の３日後にマサチューセッツ総合病院の医師団を率いて、ＪＥＴプログラムに参加していた時に住んでいた岩手県に到着しました。ハリス博士率いる医師団は凍えるような寒さの中、地域を回り、生存者に救急処置を施しました。

現役のＪＥＴ参加者たちも同様に素晴らしい活動をしました。秋田県のグループが「ボランティア秋田」という組織をつくり（秋田県でＪＥＴに参加していたポール・ヨーさんが創設）、震災後の数カ月間募金活動を行い、集まったお金で新鮮な果物を買って気仙沼市と石巻市の避難所に毎週届けました。今でも被災地でさまざまなボランティア活動をしています。

他にも現役のＪＥＴ参加者たちが始めた「マンアップ・キャンペーン」があります。「マン」には日本語で１万円という意味もあります。日本中のＪＥＴ参加者たちが、被災地支援のために翌月の給料から１万円を募金するキャンペー

ンに登録しました。この運動はフェイスブックなどを通じて瞬く間に野火のように広がり、短期間で多額の義援金が集まりました。

「スマイルキッズジャパン」は英国人の元ＪＥＴ参加者マイク・マハーキングさんが創設しました。ＪＥＴ参加者を地元の児童養護施設に派遣し、施設の子どもたちとゲームをしたり勉強を教えるなどして、子どもたちに楽しい毎日を過ごしてもらおうという活動です。この団体は震災後すぐにボランティアを動員し、日ごろから協力している児童養護施設に救援物資を届けました。この活動には他にも利点があり、自分たちを大切に思い、気にかけている人たちがいることを施設の子どもたちに示すことができました。

このように東北で直接支援活動をしているＪＥＴ参加者がいる一方で、救援と復興のための募金活動を始めたＪＥＴ参加者もいました。島根県のＪＥＴ参加者のグループは募金活動の一環として三瓶山に登り、最終的に 120 万円を集めました。一方、宮城県山元町に住む、あるＪＥＴ参加者は、この町の学校のために募金集めを始めました。活動を終えた時点での募金額は 160 万円でした。

義援金を集めるために三瓶山に上った島根県のＪＥＴ参加者たち

愛知県犬山市でＪＥＴに参加したビアンキ・アンソニーさんは、現在同市で市議会議員を務めています。彼は出身地ブルックリンの母校ザバーリアン高校と緊密な関係を維持しており、同校と協力して大規模な救援募金イベントの企画に関わり、そのイベントに参加するためブルックリンへ向かいました。また元ＪＥＴ参加者のジョン・ゴントナーさんとクリス・ジョンソンさんは、ともに日本酒専門家として名声を得ており、酒造メーカーが組織した募金活動に深く関わっています。

問　日本の復興支援活動を始めようとした時、元ＪＥＴ参加者はどのような問題に直面しましたか。

答　主な課題のひとつとして、日本では非営利組織の活動基盤と文化が比較的未発達な点があります。米国など諸外国の組織や個人は日本のために多額の義援金を集めましたが、集まった義援金を寄付する非営利組織を見つけるのが課題でした。日本でも非営利組織が増え、この問題も解決しつつありますが、こうした組織には助成金申請書の作成や米国の寄贈者の多くが求める報告の経験や知識がないことがよくあります。米国 JETAA 救援基金の強みのひとつは、さまざまな形で日本と密接なつながりを持つ元ＪＥＴ参加者の広範なネットワークを持っている点です。そのおかげで（被災者と）対話ができ、他の団体にはできないような方法でニーズや（支援を必要とする）組織を特定できました。

問　元ＪＥＴ参加者の災害救援活動に対する日本の国民や政府の反応を教えてください。

答　非常に感謝してもらいました。ある意味、国外在住日本人のような人々が世界各地に 5 万 5000 人以上もいるとも言え、その価値を実感したのだと思います。10 月に多くの元ＪＥＴ

参加者が陸前高田市の戸羽市長に面会したのですが、とても感動的だったようです。日本のメディアもＪＥＴの募金が被災地の役に立っていることを大きく報道しています。

私（と JETwit）は、震災後に JETwit を通じて私が果たした情報提供の役割を「日本国民のための持続的で広範な努力である」とたたえる感謝状を自治体国際化協会 (CLAIR) の理事長からいただきました。その他の元ＪＥＴ参加者や支部も CLAIR や外務省から同様の感謝状を授与されていると思います。

問　東北地方に派遣されていた米国のＪＥＴ参加者は震災にどのように対応しましたか。危険を顧みず現地にとどまった人はいましたか。

答　ＪＥＴ参加者たちは現地にとどまりたいと強く希望していたと思います。しかし住まいや町が破壊され、あるいは深刻な被害に遭ったため、多くの参加者は少なくとも一定期間、被災地を離れて帰国することを余儀なくされました。元ＪＥＴ参加者のキャノン・パーディーさんは、前年に派遣期間が終わっていたにもかかわらず、（自分が教えた）生徒の卒業式に参列するため（震災発生時に）南三陸町に戻っていました。結局彼女はその後もしばらく南三陸町にとどまり、復興・救援活動をすることになりました。

問　震災で亡くなった２人の米国人教師に関連し、何か特別なプログラムが設けられましたか。

答　震災で亡くなったテイラー・アンダーソンさんとモンゴメリー・ディクソンさんを追悼するプログラムを国際交流基金が創設しました。このプログラムで 2011 年に 32 人の米国人高校生が日本に２週間滞在し、日本文化を体験したり日本語を学んだりました。また米国 JETAA テイラー・アンダーソン基金は、アンダーソンさんが教えていた石巻市で、地元の学生のための交流プログラムや小学校での「テイラー文庫」の創設などの全く新しいプログラムを支援しています。ディクソンさんが教えていた陸前高田市では、米国 JETAA から寄せられた寄付金が中学生の英語検定受験を奨励するプロジェクトに充てられたため、受験者数が３倍に増加し、中学生全体の 80％近くになりました（詳細は http://www.kahoku.co.jp/spe/spe_sys1062/20120119_06.htm を参照）。

問　ＪＥＴプログラム参加者で震災の体験を書いた本を出版した人はいますか。

答　元ＪＥＴ参加者のブレント・スターリングさんは、震災の体験をつづった文章やそうした体験を表現した美術作品や写真を集めた本「Quakebook（クエイクブック）」の出版に参加しました。収益金は全て日本赤十字社に寄付されます。

岩手県大船渡市のすし店の壁の除去作業を手伝うレイチェル・ビジルガルシアさん（写真提供　JETwit）

スターリングさんは自分の体験談を寄稿し、本のマーケティング活動を手伝いました。ＪＥＴ参加者で震災当時、南三陸町に住んでいたキャサリン・オイさんのエッセーが出身大学の同窓会誌に掲載されました。他にもかつてＪＥＴプログラムに参加した多くのジャーナリストが震災に関する記事を書いています。そのうちのひとりで、福島でＪＥＴに参加したグラハム・シェルビーさんが書いた日本に関する記事は、ナショナル・パブリック・ラジオ（ＮＰＲ）をはじめ、さまざまなメディアで取り上げられました。また多くのＪＥＴ参加者が震災の経験をブログで書いています。

問　震災から１年が過ぎようとしています。現

役・元ＪＥＴ参加者による支援活動の進展状況を教えてください。

答　米国 JETAA 基金や JETAA 支部が多額の義援金を集め、そのほとんどを教育関係の非営利組織に寄付しました。しかしＪＥＴ参加者たちは、可能な方法で支援に継続して取り組んでいます。日本の復興支援のためにさまざまな募金活動が組織されていることを報告する元ＪＥＴ参加者の投稿を、フェイスブックなどで今も目にします。

問　現役・元ＪＥＴ参加者による復興支援活動にはどのような特徴がありますか。

答　被災地との絆やＪＥＴ参加者同志のつながり、そして地元の人たちと直接意思を疎通できる日本語能力があります。学校制度の中で働けば地域社会と真のつながりができます。物事の仕組みや子どもが大人になっていく過程を理解するようになります。地域社会の一員となるのです。ですからＪＥＴ参加者たちは、地域のニーズを見極めた上で国際社会に働きかけ、独自のやり方でそうしたニーズを満たす支援ができます。現場から遠く離れた大規模な支援団体よりも現役・元ＪＥＴ参加者たちの方が、いろいろな点で現場のニーズ、特に教育関係のニーズに関してより確実に把握できると思います。

＊＊＊

スティーブン・ホロウィッツ

弁護士資格を持ち、現在はニューヨークのジューイッシュ・アウトリーチ・インスティテュートで助成金申請書の作成に携わっている。ＪＥＴプログラムに参加後、デューク大学法科大学院に進学。その後日本に戻り、２つの法律事務所で働きながら早稲田大学で学んだ後、ニューヨークの法律事務所に勤務。2002 年、JETAA ニューヨーク支部のニュースレター「JETAANY Newsletter」（現在は JETAANY Magazine）の編集者となり、2005 年に日本で開催された JETAA 国際会議に JETAA ニューヨーク支部代表として参加。ニュースレター編集者として他の支部のニュースレター編集者に働きかけ、2008 年に作家・通訳者・翻訳者（ＷＩＴ）グループおよび現役・元ＪＥＴ参加者のための情報源として JETwit.com を創設。現在は JETAA ニューヨーク支部の理事と米国 JETAA 救援基金の委員を務めている。元ＪＥＴ経験者同志を結び付け、彼らのための雇用機会の発掘あるいは創出への支援を目的としている。

U.S. Forces Japan

「トモダチ作戦」と日本人の少女

「I am a 14-year-old Japanese（私は 14 歳の日本人です）」。こんな題名の電子メールが「トモダチ作戦」の支援に当たる米海軍第７艦隊の旗艦「ブルーリッジ」に勤務するマイク・モーリー少佐に届いたのは、東日本大震災の発生から２週間ほどたった頃でした。

メールは北海道に住む「シホ」という日本人の少女からで、父親の漁船が津波にさらわれてしまったので、これを探すために米海軍に力になってもらえないかと尋ねてきたのです。実は

紫保さんの父、基さんの船「第二十三宝亀丸」
(U.S. Navy photo by Chief Intelligence Specialist Michael Rouse\Released)

これより前、彼女は父親の漁船が母港から遠く離れた海上を漂っている写真が第７艦隊のウェブサイトに掲載されているのを見つけていました。たどたどしい英語ではありましたが、少女が冷静な、節度を持った態度で助けを求めていることにモーリー少佐は胸を打たれました。

モーリー少佐はシホさんからのメールを何度も読み返し、お父さんの船が見つかるよう、なんとかやってみましょうと返信しました。すると間髪おかず彼女から、希望を持って知らせ待っているという返事がありました。彼女をがっかりさせることはできない…。そう考えたモーリー少佐は、シホさんの父親の漁船の写真を撮った僚船に連絡を取りました。写真で見る限り、船の状態はとても良さそうでした。追跡調査の結果、漁船が最後に目撃された地点の緯度と経度が分かったため、モーリー少佐はこの情報を彼女にメールで知らせました。

シホさんからはこんな返事がありました。「本当にありがとうございます。私も家族も行方が分からなくなっていた船の写真を見て、涙がこぼれてしまいました」。数日後、彼女からまたメールが届きました。米海軍が提供した緯度と経度の情報を基に、日本の海上保安庁が彼女の父親の漁船を発見したので、父親がタグボート

第７艦隊司令部のウィリアムズ大佐（写真左）は、紫保さん（写真中）のメールのコピーを額縁に入れて彼女に手渡しました（右は紫保さんの父、基さん）(U.S. Navy photo by MC1 Latrice Ames)

で船を取りに行くとのことでした。彼女はモーリー少佐の親切を「一生、忘れません」とも書いていました。

あれから１年近くたった今年２月５日、米海軍に助けを求めるメールを送った少女――折笠紫保さんが家族と共に苫小牧港に寄港中のブルーリッジを訪れました。漁船の捜索への協力に対し感謝の言葉を伝えるためです。残念ながら紫保さんのメールを最初に受け取ったモーリー少佐はもうブルーリッジに乗船していませんでしたが、折笠さん一家は第７艦隊司令部参謀長のチャールズ・ウィリアムズ大佐らと面会し、ブルーリッジ艦内を見学しました。ウィリアムズ大佐からは来艦のお礼として、第７艦

隊のコインと紫保さんが最初に送った「I am a 14-year-old Japanese」と題するメールのコピーを収めた額縁が贈られました。

紫保さんの父、基さんは「船をなくしたと思った時にはすっかり希望を失いましたが、船が見つかったのでまた漁に出られます。海軍の皆さんには本当に感謝しています」と感謝の意を表しました。これに対しウィリアムズ大佐は「折笠さん一家、そして日本の皆さんのお役に立てたことを光栄に思います」と述べました。

ブルーリッジの見学を終え、第７艦隊司令部の広報担当官ロン・スタイナー中佐から見学時に撮った写真を記念に受け取る折笠さん一家
(U.S. Navy photo by MC1 Latrice Ames)

TOMODACHI

TOMODACHI
日米の次世代の若者への投資

TOMODACHI イニシアチブは日米両国の深い結びつきを体現しています。悲劇的な東日本大震災の直後、米国はトモダチ作戦を通じ、最も大きな被害を受けた地域で緊急救援・援助活動を実施し、日本の友人を支援できたことを誇りに思っています。また米国の民間部門や国民から驚くほど多くの精神的支援や義援金が寄せられ、米国から大勢のボランティアが駆けつけたことで、被災地で両国の新たな結びつきが生まれました。

私たちが東北と日本全体の長期的な復興への貢献の仕方について考え始めたのは、震災の発生から１カ月もたたない頃でした。ルース駐日米国大使は震災直後に会った陸前高田市の戸羽市長から、同市の子どもたちに米国に行く機会が与えられれば、それが最善の支援策のひとつになるという話を伺いました。米国で英語力を強化し、さまざまな経験をすれば、子どもたちは世界的な視野で物事を考えられるようになり、将来、陸前高田市の長期的な復興という重要な仕事に携わる準備になります。戸羽市長の言葉に触発され、私たちはアイリーン・ヒラノ氏および米日カウンシルと協力し、東日本大震災からの長期的な復興の基礎となる若者たちへの投資を重視する官民パートナーシップ、TOMODACHI を設立しました。

TOMODACHI は、近い将来、日本と米国、そして日米関係を担うことになる日米の若者たちへの投資に力を注いでいます。この新しい TOMODACHI 世代がつくり上げる絆は、将来の日米関係の基盤となるでしょう。TOMODACHI は教育・研究、スポーツ・音楽・芸術、起業支援・指導者育成という３つの主要分野で重点的にプログラムを実施します。

教育・研究

教育・研究プログラムは、互いの国、文化、考え方に触れるという経験を通じて日米両国の若者の人生を豊かにし、彼らに刺激を与えることを目的としています。TOMODACHI は既存の教育・研究プログラムを向上させるとともに、東北地方と連携し、日米関係全般の強化に資する新たなプログラムづくりを目指します。

例えば TOMODACHI は日本、特に東北の子どもたちに米国での短期交流プログラムに参加する機会を提供します。ゼネラル・エレクトリック、コカ・コーラ、ソフトバンクなど日米の企業から支援を受け、今年は最大で 450 人の東北の子どもたちを米国に派遣し、研修の機会を提供する予定です。

福島県南相馬市の県立原町高校を訪れた（写真前列右から）ルース大使、ソフトバンクの孫正義社長、桜井勝延・南相馬市長
（写真　在日米国大使館）

また日米の生徒をつないで英語学習を支援するバーチャル・クラスルームも推進しています。最先端のソフトウエア・ハードウエア技術を活用し、生徒同士の交流を深め、日常生活で英語を使う機会を増やす取り組みです。

ＧＥファンデーションは東北地方の大学向けの医療教育プログラムを後援しています。このプログラムには次世代の医療情報の専門家を育成する大学課程や、地域の保健分野での協力を推進する開業医、介護専門家、地方自治体を対象にしたセミナーなどが含まれます。

スポーツ・音楽・芸術

日米両国の人々が互いの文化について学び、長く興味を持ち続けるきっかけとなるのがスポーツ、音楽、芸術です。TOMODACHI は長年

著名ミュージシャンのウィル・アイ・アムもTOMODACHIへの支援を表明しました（写真　在日米国大使館）

続いている数多くの権威あるプログラムや、日米の著名スポーツ選手、芸術家、ミュージシャンや音楽家、芸能人と協力します。ウィル・アイ・アムやトム・クルーズなどの著名人が日本でのイベントでTOMODACHIへの支援を表明しており、被災した方々とも交流しました。

TOMODACHIは米大リーグとも協力し、野球をするという両国共通の楽しみを通じ、東北の子どもたちが元気を取り戻すよう支援してきました。元大リーグ選手でアメリカ野球殿堂入りを果たした「鉄人」カル・リプケン・ジュニア氏が国務省のスポーツ特使として来日し、ボルチモア・オリオールズの元チームメートであるブレイディ・アンダーソン氏、日本プロ野球の「鉄人」として知られる衣笠祥雄氏と共に、東京、大船渡、西宮、京都で野球教室を開催しました。また震災で被害を受けた東北地方の野球場や施設の再建、野球の道具やユニフォームを東北の子どもたちに提供して、再び野球ができる環境を整えようとしています。

鉄人リプケンが開催した野球教室（写真　在日米国大使館）

起業支援・指導者育成

多くの若者や地域社会の指導者たちが、東北地方の復興と長期的な経済の繁栄に向け、起業家精神と指導力の発揮を求める声に応えて立ち上がりました。TOMODACHIは成功するために必要な技能、専門知識、資金をそうした若者や指導者に提供することで彼らの取り組みの支援と進展を促すプログラムを推進しています。

東京アメリカンセンターは先ごろ慶応大学と合同で、東北地方の経済復興に重点を置いた「アントレプレナーシップ・セミナー・アンド・ビジネスプラン・コンテスト」を開催しました。このイベントには10校から50人の学生が参加し、東北地方および北海道の大学に所属する学生が半数以上を占めました。このセミナーを通じ、学生たちはセミナーで知り合ったアドバイザーや支援者からの助言を受けながらビジネスプランを実施する意欲を持つようになりました。「TOMODACHI世代への投資」がこの合同セミナーのテーマであり、参加者にはルース大使の署名入りの認定証が贈られました。

TOMODACHI世代への投資

東北地方の人々は東日本大震災で全てをなくしたように思われました。しかし被災地の若者たちが将来の希望や夢をなくすことは一度もありませんでした。むしろ私たちが目にしたのは、東北を再建し、この国を活性化しようという日本全国の若者たちの決意でした。TOMODACHIは日本と米国の若者の向上心を支援し、夢を持ち、その実現に向け計画を立て、実行する日米の将来の世代、すなわち互いの文化や国を理解し、成功と社会への貢献に必要な世界中で通用する技能と国際的な視点を備え、日米関係の将来に深く関わるTOMODACHI世代の育成を目指しています。

ルース大使を見送る福島県川俣南小学校の子どもたち（写真　在日米国大使館）

3.11 を忘れない～東日本大震災追悼イベント

東北地方に甚大な被害を与えた東日本大震災から、この３月 11 日で１年たちます。１年前の出来事を振り返り、震災で家や町、愛する人たちを奪われた被災者や亡くなった犠牲者を悼むため、日米のさまざまな組織が数多くの追悼行事を計画しています。それぞれのイベントの詳細については主催者にお問い合わせください。リストの最新版は在日米国大使館のウェブサイト (http://amview.japan.usembassy.gov/j/amview-j20120301-06.html) をご覧ください。

2:46 and thereafter

2012 年２月 16 日～３月 25 日

新進気鋭の芸術家を支援するワシントンＤＣの非営利組織、トランスフォーマー (Transformer) は、東京を拠点に活動する若手アーティスト・グループ「団・DANS」と共同で、東日本大震災を受けて制作された若手日本人アーティストの作品を集めた展示会「2:46 and thereafter」を開催します。18 人のアーティストがインスタレーション、絵画、ビデオ、彫刻、写真、デッサンなどを通じ、日本観測史上最大規模の地震に見舞われた後の生活に順応しようとする日本人の多くが探究している問題に取り組みます。TOMODACHI も後援するこの展示会は、ワシントンＤＣのペプコ・エジソン・プレイス・アートギャラリーで全米桜祭りの一環として開催されます。

Tohoku Today: Rebuilding for a Better Tomorrow

2012 年２月 28 日～３月 10 日

東日本大震災からの東北地方の復興を記録した写真展をワシントンＤＣのナショナル・プレス・クラブで開催します。最も被害の大きかった地域でも着実に復興が進んでいる様子が写真から伺えます。

Overcoming the Disaster: Arigato from Japan

2012 年３月２日

東日本大震災後に世界中から寄せられた非常に大きな支援に対する日本国民の感謝の気持ちを伝えるために、さまざまなジャンルで活躍する日本のトップ・ミュージシャンがロサンゼルスのアーマンソン・シアターを皮切りに、３カ国の都市を巡るツアーを開催します。ロサンゼルスでのイベントは、在ロサンゼルス日本国総領事館と国際交流基金が主催します。

Kokoro: Heart of Japan（日本の「こころ」から東日本大震災を考える）

2012 年３月６日

東日本大震災から１周年に当たり、東京財団はコロンビア大学東アジア研究所との共催で、現代日本を代表する俳人のひとり、黛まどか氏を迎え、シンポジウムを開催します。会場はニューヨーク市のカウフマン・センター内マーキン・コンサート・ホールです。シンポジウム終了後には福島の人々にささげる新作合唱曲「そして、春～福島から世界へ」が初演されます。

震災から一年：ぬぐい去れない映像祭り

2012 年３月 10 ～ 11 日

東日本大震災から１年の間に起きたさまざまなドラマを私たちに伝えるため、自らの人生を投じた映画製作者たちに敬意を表する２日間の特別なイベントを日本外国特派員協会が東京で開催します。ボランティア団体、東北出身のアーティスト、ミュージシャン、職人、酒造メーカーなども参加する予定です。

Winds for Hope: Tomodachi through Music

2012 年３月 11 日

ワシントン大学ウィンドアンサンブル、シアトル交響楽団の首席トロンボーン奏者の山本浩一郎氏ら、米国北西部および日本出身のクラシックやジャズの演奏家が、シアトルのベナロヤホールで開催される日本支援のチャリティ・コンサート「Winds for Hope: Tomodachi through Music」に参加します。コンサートの収益金は、被災地の子どもたちに贈る楽器の購入に充てられます。

震災 SHINSAI: Theaters for Japan

2012 年３月 11 日

全米各地の劇場が東日本大震災１周年を迎えての演劇イベントに参加します。この１日限りのイベントのために日米のアーティストが無料で提供した 10 分間の芝居や歌で、プログラムは構成されます。全米の各劇場は、それぞれの所属アーティストによる独自の催しも開催できます。当日、観客は義援金を日本劇作家協会に寄付でき、同協会は集まった義援金を被災した劇場や演劇人たちに分配します。ニューヨーク市では、芝居と歌は全てクーパー・ユニオン大学大ホールで上演されます。

A Day of Remembrance, A Day of Preparedness, A Day of Rebuilding
2012 年 3 月 11 日

東日本大震災被災者の支援団体、シアトル・ジャパン・リリーフ (SeattleJapanRelief.org) と在シアトル日本国総領事館が、シアトルセンター内のフィッシャー・パビリオンと神戸の鐘において特別イベントを開催します。プログラムは田形ふみ氏の歌唱、琴アンサンブル「シルク・ストリングス」の演奏をはじめ、地域および国の危機管理当局や、非常時に対する備えを提唱する非営利団体による展示や説明会などで構成されます。またドキュメンタリー「がんばっぺフラガール！」の特別上映や災害と復興をテーマにした写真展のほか、東北地方の子どもたちからの希望に満ちたメッセージも紹介されます。来賓のあいさつに続き犠牲者を追悼する仏式の式典が営まれた後、一般参加者は神戸の鐘を突くことができます。

One Year Later: A Day of Reflection
2012 年 3 月 11 日

ニューヨークのジャパン・ソサエティーが一連の追悼行事を主催します。東北地方の子どもたちが東日本大震災以降に制作した絵画などの作品が展示され、来場者はそれを見た感想を書いたり、芸術的に表現したりすることができます。また来場した子どもたちは、東北地方の子どもたちに贈られるハッピードール（ほほ笑む希望の大使）のデザインや制作にも参加できます。ルーシー・ウォーカー監督のアカデミー賞候補作品「The Tsunami and the Cherry Blossom（津波そして桜）」、ステュー・リービー監督のドキュメンタリー映画「Pray for Japan ～心を一つに～」、ＮＨＫワールド制作の「Can You See Our Lights?」も上映されます。

Run for Japan 2012
2012 年 3 月 11 日

カリフォルニア州マウンテンビューのショアラインパークで、チャリティマラソンとチャリティウォークのイベントが開催されます。日本の被災者への義援金の募集だけでなく、これからも粘り強く、完全復興への希望を持ち続けられるようにと日本を勇気づけるメッセージを送る機会をベイエリアの住民に提供することも目的としています。Run for Japan 2012 の全ての収益金は、地震と津波で壊滅的被害を受けた東北地方の小学校で必要とする設備の購入と輸送に使われます。

Postscripts from Japan: Stories that Endure after the Earthquake and Tsunami
2012 年 3 月 11 日

バージニア州アシュランドのランドルフ・メーコン・カレッジが、国際交流基金日米センターからの助成を受け、東日本大震災で犠牲となった同大学の卒業生テイラー・アンダーソンをしのぶテイラー・アンダーソン／ジャパン・ファウンデーション公開セミナー「Postscripts from Japan: Stories that Endure After the Earthquake and Tsunami」を開催します。セミナーには藤崎一郎駐米日本大使も出席するほか、ナショナル・パブルック・ラジオのノグチ・ユキさんによる基調講演が行われます。

Remembering Tohoku: Looking Toward a Brighter Future
2012 年 3 月 11 日

東日本大震災から 1 年目の 3 月 11 日に、ポートランド日本庭園（オレゴン州）で犠牲者を追悼するイベントが開催されます。琴の演奏や染色家・斉藤洋氏がライフワークとする「野染め」活動の紹介のほか、記帳台も設けられます。

絆　Kizuna: The Bonds of Emotion
2012 年 3 月 12 ～ 16 日（イリノイ州トンプソン・センター）
2012 年 3 月 21 ～ 31 日（シカゴ・フォトグラフィー・コレクティブ・ギャラリー）

東日本大震災後、日本人の立ち上がる力や高潔さを示す素晴らしいエピソードがさまざまなところで語られました。日本経済新聞社は多くの写真を通じ、被災地の惨状と復興活動を記録してきました。このうち 46 枚の写真が、全米姉妹都市協会シカゴ支部の大阪委員会とシカゴ日米協会の主催によりシカゴの 2 つの会場で展示されます。

Japan in a Day プロジェクト
2012 年 3 月 11 ～ 25 日（動画投稿期間）

人々が東日本大震災から 1 年目の 3 月 11 日をどのように過ごしたかを記録するドキュメンタリー映画を、リドリー・スコット監督とフジテレビが共同で製作します。この映画には一般の人々から募集した動画も使われます。震災の犠牲者や被災者にささげられるこの映画は、完成後、全世界で公開される予定です。

The Tsunami and the Cherry Blossom（津波そして桜）
2012 年 3 月 17 日

アカデミー賞候補作品「The Tsunami and the Cherry Blossom（津波そして桜）」が、

全米桜祭りの一環としてメリーランド州シルバースプリングのＡＦＩシルバー・シアターで上映されます。ルーシー・ウォーカー監督は当初、日本で「桜の花を詠んだ俳句のような映画」を作る予定でしたが、2011 年 3 月 11 日に日本で未曽有の地震と津波が発生し、その計画を大幅に変更しました。大きな被害を受けた東北地方の村で被災者たちにインタビューし、忘れることができない衝撃的な津波の体験を語ってもらいました。その様子をフィルムに納め、日本の文化では再生の象徴として深く根付いている桜の花に例えました。この映画はアカデミー賞にノミネートされたドキュメンタリーと短編映画を紹介するイベントの一環として、2012 年 2 月 26 日にワシントンの米国国立公文書館でも上映されます。

Hana Hou Showcase Fundraiser

2012 年 3 月 23 日

被災地の子どもたちがハワイ州ワヒアワでの文化交流イベントに参加します。子どもたちはハワイ・レインボーキッズ・プロジェクトを通じて 3 月 18 日から 26 日までハワイを訪問し、TOMODACHI が一部費用を負担する教育・文化プログラムに参加して心と体を癒やします。子どもたちを受け入れるワヒアワ市民の団体「ワヒアワ・コクア・フォー・ジャパン」が、被災地の子どもたちを支援する活動の第 2 弾として、震災 1 周年を迎えての募金イベントを企画しています。

Rainbow for Japan Kids Charity Talk Live

2012 年 3 月 25 日

ハワイ・コンベンション・センターで開催されるハワイ・レインボーキッズ・プロジェクトの募金イベントに、日本人ミュージシャン、さとう宗幸氏と小柴大造氏が出演します。ハワイアンを演奏する 3 人組のファミリーバンド、マノアＤＮＡも出演します。またハワイ・レインボーキッズ・プロジェクトのプログラムでハワイを訪問中の日本の子どもたちが、ハワイの子どもたちと歌ったり、滞在中に製作したウクレレを演奏します。

ハリウッド・ナイト

2012 年 3 月 30 日

ヒルトン福岡シーホークは在福岡米国領事館との共催で「ハリウッド・ナイト」を開催します。バンドの生演奏、カリフォルニアワインやお食事、サイレントオークションにスペシャルゲストの登場など、盛りだくさんのエンターテインメントをご用意しています。全ての利益は TOMODACHI を通じて東日本大震災復興支援金として寄付されます。

山木屋太鼓グループ

2012 年 4 月 16 日

今年は日本から米国に桜の木が贈られて 100 周年です。これを記念する全米桜祭りの一環として、福島県の山木屋太鼓グループの 12 人のメンバーがワシントンＤＣとその周辺地域を訪れ、ジョン・Ｆ・ケネディ・センターなど複数の会場で演奏します。山木屋太鼓グループのプログラムは、TOMODACHI の名の下、かつてＪＥＴプログラムに参加した米国人の協力を得て、ワシントンＤＣ日米協会が支援します。